

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2017年4月13日放送

「第67回日本皮膚科学会中部支部学術大会 ①

大会を終えて」

兵庫医科大学 皮膚科
教授 山西 清文

テーマは“学理と臨床のフロントライン”

平成28年10月22日と23日に、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）において、第67回日本皮膚科学会中部支部学術大会を開催させていただきました。兵庫医大が中部支部学術大会を担当させていただくのは、昭和56年に相模成一郎教授が開催された第32回大会、平成12年に喜多野征夫教授が開催された第51回に次いで、今回で3回目になります。

さて、我々は日常臨床の中で、皮膚科医として、安全かつ科学的な根拠やコンセンサスに基づいた診療を提供する責務を果たさなくてはなりません。そのためには、社会からの要請に応じて、“皮膚疾患の真理”と“より適切な診療”を常に追い求め、日々努力する必要があります。そこで、本大会ではテーマとして、“学理と臨床のフロントライン”を掲げ、急速に進歩しつつある皮膚科学のサイエンスと臨床について、参加者の皆様に理解を深めていただく機会にしようと考えました。

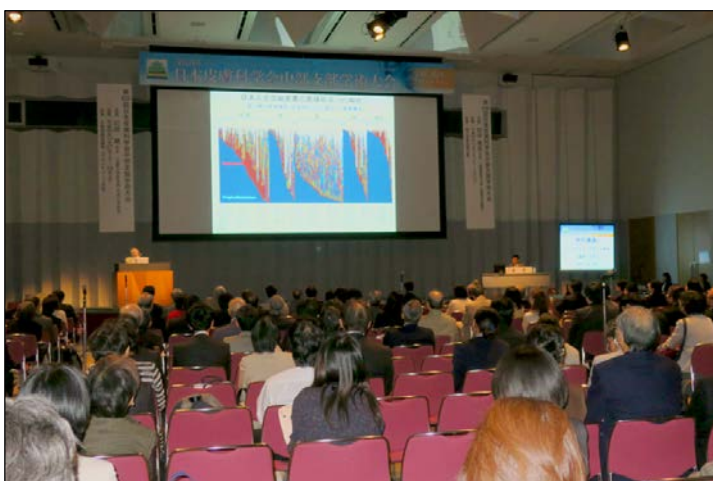


講演内容

学会の初日は、私自身が長年携わって参りました皮膚難病・難治性皮膚疾患と兵庫医大の研究の特色の一つである自然免疫をコアにし、2日目は、実地医家の先生方を対象とした内容に重点をおいて、講演をお願いしました。

招待講演は、カリフォルニア大学デービス校の Samuel T. Hwang 先生に、皮膚疾患におけるケモカインの役割について講演いただきました。表皮角化細胞は皮膚の炎症に際しケモカインを産生しますが、Hwang 先生は、ケモカイン CCL20 の受容体 CCR6 をもつ T リンパ球が IL-17 を産生することを発見されたことで大変著名な先生です。この T リンパ球は現在では Th17 細胞と呼ばれて、ご承知の通り、乾癬の病態に中心的な役割を果たしています。Hwang 先生は、皮膚疾患におけるケモカインの機能について長年研究を進めてこられ、今回は、CCR6 を発現する $\gamma\delta$ T 細胞が IL-17 を産生することや、CCR6 を標的とした乾癬の新しい治療法の開発を中心に、最新の研究成果について講演されました。

続いて、特別講演1として、ヒトのマイクロバイオーーム（微生物叢）について、早稲田大理工学術院教授の服部正平先生に講演いただきました。ヒトの皮膚、口腔粘膜、消化管等には、組織ごとに固有のマイクロバイオーームが存在し、普段は宿主と協調して生息しています。近年、次世代シーケンサーを用いて、微生物の分類や機能遺伝子の解析ができるようになりました。服部先生は、日本および12か国のヒトマイクロバイオーームの大規模な比較解析データを示しながら、外的侵襲、遺伝的要因、生活様式、衛生状態、免疫系の影響によりマイクロバイオーームの構成が変化し、さまざまな疾患に関与する可能性について解説されました。



特別講演2では、保険医として遵守すべき診療のルールについて、現在、大阪医大医療管理室教授の上田英一郎先生に講演いただきました。上田先生は、指導医療官として医療行政に携わった視点から、不当診療・不正診療の例を具体的に提示し、逸脱行為があった場合の行政処分について解説されました。また、保険診療の適切な運用のみならず、医療の質の向上のためにも、診療録記載の重要性を強調されました。

シンポジウム1「皮膚難病克服への挑戦」では、稀少難治性皮膚疾患の治療に向けた最先端の取り組みについて、大阪大の玉井克人先生をはじめ、中部支部のリーダーの先生方に解説いただきました。どの先生方の取り組みも、難病患者さんの QOL の改善や希望につながる素晴らしい内容でした。

シンポジウム2「自然免疫と皮膚疾患」では、前兵庫医科大学長の中西憲司先生が基調講演を行い、アレルゲン・IgE複合体がなくても、上皮から産生されるサイトカインであるIL-18やIL-33の刺激だけでアレルギー反応が生じる、「自然型アレルギー」について講演されました。当教室の今井康友（本学会の実行委員長）は、表皮および角膜・結膜上皮のIL-33の発現増加によって2型自然リンパ球（ILC2）が活性化され、アトピー性皮膚炎およびアトピー性角結膜炎が発症するという、アトピー性皮膚炎の新しい発症機構を紹介しました。また、関西医大の神戸直智先生はIL-1が発症に関わる自己炎症症候群の臨床的特徴と病態について、愛媛大の村上正基先生は皮膚における抗菌ペプチドの機能や疾患との関わりについて解説されました。参加者の皆様には、皮膚疾患における自然免疫系活性化の重要性についてご理解いただけたのではないかと思います。

シンポジウム3「迷わない！皮膚感染症の診療」では、基調講演として、兵庫医大感染制御部教授の竹末芳生先生に手術部位感染（SSI）予防対策を解説いただきました。都立墨東病院の沢田泰之先生には、緊急対応を要する壊死性筋膜炎や劇症型溶連菌感染症などについて、岐阜大の清島真理子先生にはヒトパルボウイルスB19、CMV感染症で生じる多様な症状と対応について、新宿さくらクリニックの澤村正之先生には性行為感染症について、それぞれ症例を提示しながら、実臨床に役立つ要点を解説いただきました。

美容皮膚科フォーラムでは、皮膚科学に基づく適切な美容皮膚科診療推進について、順天堂大附属浦安病院の須賀康先生と東京女子医大附属成人病センターの根岸圭先生に講演いただき、美容皮膚科未経験の参加者の皆様にも大変好評でした。

教育講演は、膠原病、血管炎、難治性自己免疫性水疱症、アトピー性皮膚炎、真菌症、皮膚外科の6タイトルについて、福井大の長谷川稔先生をはじめ、中部支部の各分野のマスターの先生方に講演いただきました。また、教育講演とは別に、本会のテーマに相応しい臨床および研究実績を上げておられる先生方には“フロントラインセミナー”で講演いただきました。いずれの講演も含蓄のある、先進的な内容で、日常臨床や研究に大変参考になる講演でした。

CPCは神戸市立医療センター中央市民病院の村田洋三先生と関西医大総合医療センターの清原隆宏先生にオーガナイズいただきました。顔面、顔面以外、掌蹠、爪の部位ごとに、メラノサイト系病変の臨床とダーモスコピー、病理組織の関連性を考察いただき、色素性病変診療の向上に役立つ内容でした。

おわりに

一般演題・ポスターは全国のご施設より症例・臨床研究等、話題の治療や診断技術を駆使した内容、貴重な症例など、175の演題を応募いただきました。お陰様で会期中に1,400名を超える皆様にご参加いただき、会を無事に終了できました。ご参加の皆様をはじめ、ご講演いただいた先生方、座長、オーガナイザーをお努めいただいた先生方、また、ご指導いただきました日本皮膚科学会事務局、ご後援いただいた蘭芷会（兵庫医大皮膚科同

門会)、兵庫医大関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、学会開催に際し、運営事務局を担当頂いた株式会社サンプラネットメディカルコンベンション事業部の皆様、セミナーの共催、協賛をいただきました製薬業界、医療関連企業の皆様にも厚く御礼申し上げます。



山西清文 会長